

【発行者】新潟農業普及指導センター
新津庁舎：0250-24-9624、津川分室：0254-92-0965

単収 200kg 以上、2等級以上を目指して

湿害・干ばつ対策の徹底と適期防除で 収量・品質向上

1 生育及び作業状況

- 播種後にはほ場が乾燥し例年より出芽に時間がかかったが、出芽率は並であった。6月始めの播種は碎土率が高かったが、それより少し遅れたほ場は降雨の影響で碎土率が低く出芽に影響した。

2 排水・湿害対策

- 1か月予報(6/28~7/27)では、降水量は少ない確率50%の予想であるが、梅雨後半の豪雨に備え浸水被害対策や湿害対策を徹底する。
 - 明渠に「つまり」や「くずれ」がないか確認し、確実に排水路に繋げる。
 - 畝間を明渠に繋げる。
 - 暗渠栓、水尻を開放したままにする。
- 湿害による葉の黄化や生育不良の症状が見られた場合、排水対策を徹底した後、速効性肥料を窒素成分で2~3kg/10a追肥し、培土する。

3 干ばつ防止対策

- 3か月予報では8月に高温が予想されているため、干ばつが予想される場合は、梅雨明け後は暗渠を占め地下水位を維持する。
- (1) 暗渠栓の管理
 - 排水の良いほ場では、梅雨明け後に暗渠栓を閉め、地下水位を維持する。
 - まとまった降雨があった場合は、速やかに暗渠栓を開け、排水に努める。
- (2) 畝間かん水の実施(条件:排水の良い圃場※1日以内に地表水を排水できる)
 - 畝間かん水の目安
 - 高温・少雨で晴天が2週間以上続いた場合
 - 最頂葉の小葉が直立し(図)、ほ場全体で葉の裏面が目立ってきた場合
 - 夕方からかん水し、ほ場全体に行き渡ったらすぐに排水する。
 - 大区画ほ場は数日に分けてかん水する(水口付近の湿害防止)。



図 かん水のめやす(直立した小葉)

4 雑草対策

○降雨の影響で中耕・培土が遅れる又はできない場合は、雑草対策を優先し生育期処理除草剤を適正に使用する。

- 全面散布できる茎葉処理除草剤（イネ科用除草剤、広葉用除草剤がある）
- 畦間散布用の非選択制の茎葉処理除草剤（大豆にかけないように注意！）
- 畦間・株間散布用の茎葉兼土壌処理除草剤

○中耕・培土は、開花始期（7月20日頃）までに終わる（生育抑制・落花・落莢防止）。

○帰化アサガオ類が発生している場合は、除草の徹底と被害拡大防止に努める。除草剤散布、中耕・培土を実施しても雑草が残った場合は、早めに手取り除草する。



帰化アサガオ類は、つるが発生する前に、除草しましょう。

5 病害虫防除——葉焼病、ウコンノメイガ、紫斑病、マメシンクイガ

(1) 葉焼病

○里のほほえみで開花期頃（7月下旬頃）に発生が確認されたら防除する。

(2) ウコンノメイガ(ハマキムシ)

○播種期の早いほ場、葉色の濃いほ場で発生しやすい。

○7月下旬に1株平均2つ以上の「葉巻」が確認されると、防除が必要となる。

「葉巻」の発生初期（7月下旬～8月上旬頃）に早めに防除する。

(3) 紫斑病

○防除効果の高い開花期4週間後頃に防除する。薬剤散布を複数回実施する場合は、開花期3週間後頃または5週間後頃に追加で散布する。

(4) マメシンクイガ

○連作ほ場や前年に多発したほ場で発生しやすい。

○例年多発生しているほ場では、防除効果の高い8月下旬と9月上旬の2回、莢に薬剤がよく付着するよう留意し防除を実施する。

農薬の使用にあたっては、ラベルに記載されている使用基準や注意事項・使用方法をよく読み、内容を遵守して使用しましょう。周辺への飛散に注意！！